

代表からのご挨拶

サンライズ・メイト・バート株式会社

代表取締役 井上 明美



いつも皆様方には、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

日増しに秋の深まりを感じる季節となりましたが、いかがお過ごしですか。ウクライナ情勢には胸が痛みます。ロシア一般の人達の徴兵制度、一人一人の気持ちを無視し戦争に加担させ

る制度を行使している指導者には疑問符しか浮かびません。指導者たる者国民が幸せになるように導くものではないのか？誰でも解ることが上に立つと対面やプライドに惑わされ違った道を突き進む・・・病気で生きてくても生きられない人達を目の前にしている現実と一方では殺し合いをする現実、やるせない思いに駆られます。一日も早い終息が来るように願うばかりです。これからの季節冷え込みが厳しくなりますのでお身体にお気をつけてください。

サンライズの物語

様々な立場から考える——

安心安全な社会について考える物語



9月は毎週末台風の襲来に驚きました。台風が来る度に思い出すのは3年前、2019年10月12日過去最強クラス台風19号、大型で強い勢力を保ったまま伊豆半島へ上陸したのです。

風速25mの暴風域を伴い12日（土）夕方から夜にかけ関東地方に上陸した時の事です。区の広報が避難するようにアナウンスが何度も流れ恐怖が一層身近に感じたのです。

利用者の家族からの電話が鳴り止まず「川が氾濫したら1階に寝ている夫を置いて逃げられない」「二階に上がりたいが一人では上がれない」等の電話です。「川が氾濫したらご主人のベットを一番高く上げギャジして最悪奥様だけ2階へ逃げて欲しい」と伝えるのが精一杯だったのです。

後日他の方々からも当日の状況を聴きましたが、暴風雨の中小学校へ逃げたが階段しかなかった事。トイレが和式で入れなかった事。皆さんが口を揃えて言った事が「弱い者には死ねと言うことなのか。悔しかった。いくら逃げろとアナウンスがあっても逃げられない」と泣いておられました。

家族からは「この悔しい思いをどこの機関に伝えたら改善してくれるのか」との問いかけも沢山あったのです。

今、BCP（業務策定計画）が叫ばれておりますが、高齢者お一人お一人が安心して過ごせる社会を作らねばならないと思います。



敬老の日の撮影スポット
 壁紙制作
 画用紙でじゃばらの飾りを作り壁に貼り付けて写真撮影しました。

誕生日

誕生日カードを差し上げおやつでケーキを出しました。皆さん「ありがとう」「ケーキ美味しい」と言って喜んで召し上がられています。



NEWS 今月のニュース

最期まで心に寄り添う 介護会社カラズ創業の田尻さん 原点は亡き母への後悔

田尻久美子さん（47）が介護会社のカラズ（大田区）を創業したきっかけは、母を亡くした時に「寄り添えなかった」という後悔だった。子育てと仕事の両立や父の終末期介護まで経験。大切な人に助けが必要になった時に何ができるかを考え続け、新たな事業につなげてきた。自分と同じ後悔をさせたくないという思いを抱きながら。（渥美龍太）

◆母を受け止められず

1990年ごろ、40歳を前にした母からSOSが出始めた。「眠れない」「つらい」。10代だった田尻さんは自分のことでまだ精いっぱい。病名を聞いても「50歳まで生きるのが目標」との意味深な言葉さえも現実感がなかった。

田尻さんが就職し24歳になった99年夏、闘病中とはいえ前日までいつも通りだった母の容体が急変。「目標」に届かない48歳で亡くなった。「母の言葉を受け流し、真剣に考え

なかった」と悔やんだ。

喪失感が消えない中、出した答えが介護業界への転身だった。大手での修業を経て2011年末に創業、ほぼ同時期に出産した。「仕事は子育てと両立できると思っていたが、不可能だった」。この経験が産前産後の家事・育児支援を始めるきっかけになった。

◆願いをかなえる

13年には、がんを患う父から「家で最期を迎えたい」と言われた。自ら医師を手配するなど、自宅での介護体制を整えた。最後の3年半ほどを共に過ごし「母の時と違い、家族全員の温かい時が流れる中での別れができた」と振り返る。

「終末期の在宅支援をやりたい」気持ちが高まり、今年4月に定期巡回の介護や訪問看護などを組み合わせ、事業化。直後に「いつ亡くしてもおかしくない」女性のケアを依頼された。何をしたいか丁寧に聞き取る中で出た言葉が「息子の結婚式に出たい」。看護師らのチームが寄り添い励まし続け、6月の当日を迎えられた。女性は2時間半の式と披

露宴を見届け、「幸せでした」と感謝を口にして、翌月息を引き取った。

◆気持ちを想像し続ける

田尻さんは年末に、母が亡くなった48歳を迎える。力が弱い人でも使いやすい車いすを町工場と共同で開発するなど、介護現場で必要なサービスは何か試行錯誤を重ねる日々。時折、母との最後の日々を思い気を引き締めるといふ。「依頼者がどんな気持ちを抱き何を求めているか、たとえ分からなくても想像し続ける。それが最も大事なのだと強く感じている」



カラズ開発の車いす = 大田区で
 <東京新聞 2022/9/25(日)>

広報誌「ライジング・サン」のバックナンバーは、弊社ホームページでもご覧いただけます。

ぜひお立ち寄り下さいませ。 <http://www.samaba.jp/back-number/>